

台密教の本質

藤井周慶

一―教理史的考察、二―その中心思想

護法金剛豪實の教要補闕贅語に「吾山家教風、臺密之務、從古有三門之習、以爲學密道之規。所謂三門者、一者教相、二者事相、三者現行」と言つてゐるように、東密の如く教相事相の二門に分けることもあるが、我が臺密は所謂三門を立てるのが一般である。教相とは、住心品及義釋。事相とは具緣品以下の經釋及其他の密教經軌。而して現行とは、十三流諸師傳法書を呼ぶことゝなつてゐる。就中現行門は阿闍梨相承の深祕口訣であるから最も之を重んじ、西山流に於ける阿沙婆鈔の如きは實にそのオーソリチーである。既にこの事は東密の宥快師も大疏傳授抄(二十七)

他門智證大師疏家唯設淺深之兩釋給。其上深祕在師口疏^{リット}不見得意給也。故其深祕密之說在^{リット}師之口^{ジヘッ}判給。

といふてゐる。今その事相、現行は吾人の述べべき限りでないから唯教相を中心として、その一般を窺ふに止むる。さてその教相門にはすべて顯密二教判を立てゝゐるが、それは決して東密の如く峻

嚴なものでなくて、總て三乘教を顯とし、一乘教をば密とするのである。何れこれは後節に叙ぶる所存であるが今一往その概念を言へば、先づ東密宗家は横豎二判を設けて、一切佛教をば、すべて應化所説隨他意教とし、猶華天一乘までも無明分域隨つて經劫作佛の宗教とし、而して獨り即身成佛の教、そして法佛如義語、隨自意教にして釋論に所謂性德圓滿海の金剛乘のみ密教 せられてゐる。これかれが立教開宗上當然の事であつて亮海師が十住心玄談に推賞して止まない所以であらう。(因みに横豎の名稱は別に宗家自ら用ひたのでなく、この權輿は恐らく南山學匠蓮華院俊晴にあるべく、東寺杲實、新義賴瑜も指光鈔に使用しゐるから、今便宜上これに従つてをく。且つその豎判に就いても、廣論略本の所明各々不同あり、其他或は心品轉昇に、或は五種三昧道に、或は普門萬德に約して考察する等種々の見方はあるが、それ等はすべて快抄、義林、指光鈔等に譲り、今は唯略論所説のみを採つてをく)。また臺密はその顯密批判に略々かれと同じ基準を用ひ乍ら、顯教を以て唯三乘權教のみとし、密教中には廣く法華一乘までも攝めてゐる。これ蓋し遠くは義釋(疏三餘七)の「今此經宗橫統一一切佛教……如說如實知自心名一切種智則佛性、一乘如來祕藏皆入其中」(二十九右)とあるに淵源し、近くは山家の法華秀向照權實鏡等に出づる教風を忠實に傳へてゐる結果であらう。今試みに形式論理の定律を假つて示さば、彼は「密教」の外延量を狭めた結果、その内包は著しく増加し、純密教の面目躍然として現はされてゐるが「顯教」てふ概念却つて曖昧となり、經劫作佛論、

無盡對六大緣起論等の問題を惹起するに至つた。之れに反して此は「顯敎」の外延を減じてその意味が判明したが、「密敎」の概念の適用の範圍を廣むるの極、その特色や漠として認め難く、遂に彼れから「猶顯網域を脱せず」てふ批難を受くるに至つたのも亦止むを得ぬであらう。かくて「密敎」概念の内容吟味に際し且つ又同じく密敎てふ一サークルに入れらるゝ圓頓一乘と、金剛瑜伽敎とは全同一味で些の差降もないものであらうか。若し兩々同一だとすれば殊更奇を好んで遮那を珍重する必要もなく、若し全異だとすれば、敢て臺祖の敎旨を聞いてまでも他山の石を弄ぶは寧ろ獅子身中の蟲云ふべきであらう。臺密敎相の論點は實に此處に存する。而かもこれが解答は異說紛々、或はともすれば遮那をして止觀に冠たらしめんとする三井敬光の如きあり、或は敎、行、人、理、俱に兩敎一致を證明し、猶三密權方便説を高潮せる止觀業學匠寶池房證眞の如きあつて一準ではない。だから、今我々が臺密敎の本質を考察するに當り、一往これ等の諸説を一瞥してをくも必ずしも無益ではあるまい。加之、彼此兩密を執つて比較するに彼れは宛も淀河が常に盡くる事なき大湖にその源を發するその如く、實に弘法大師を高祖としそが永き流傳史上には固より幾多の波瀾は免れなかつたにしても、その敎理形式は更に變る所もないが、此れと反對にさながら潺々たる碓氷の溪泉に濫觴する利根川の如く、源を山家傳敎大師の止觀遮那双修に發し、五大院に至つてその敎學を完成して以てその面目をば發揮したのであるから、單に諸家の異説を平面的羅に列するよりも、寧

る發生史的に之を觀察した方が興味定めて多きことと思ふ。請ふ、以下少しくこれを概説することとする。

一、

臺東の分裂は世人多く、これが開祖を傳教弘法兩大師に求め、地理的に臺嶺と東寺に探らうとしてゐるが、その實は遠く、兩部大經更に兩界即ち一法界多法界思想に溫ぬべきであると思ふ。即ち吾人は先づ或は經典史學、或は流傳史上より、はたその組織的考察の下に於て其他種々の見地よりして金剛頂系の經軌が華嚴經典と氣脈相通する所少なくない如く、大日經が亦同一方法に於て法華經の中心思想と頗る一致點多きを發見する者である。隨つてかの法性大日義（合纂二二四P）に『東寺相承順不空立教多法界爲宗極者也』と言つてゐるようによしんば金善互爲の事實があつたにしても兎に角金剛頂傳持者たる大廣智三藏の敎系に屬する東密が、そが宗祖の環境に於ける華嚴との密接な關係と相俟つてその多法界表徳的な特色を發揮せしは當然のことであり、また台密が既に東密宗家の撰と傳ふる法身三密觀（全集四、八四四P）などに「一行禪師以天台義爲誠證、己違其義、寧可依憑乎」と云ふてゐる如く、一行によつて筆授され、智儼によつて校訂し溫古（ウシゴ）の手を経て再治せられて漸次天台敎義に接觸せし義釋（敎時義、義釋目錄、長宴記參照）を根本正依とし、且つ自ら臺の領野に培はれた結果、竟に圓頓一乘と握手するが必然の成行きでなければならぬ（因みに義釋中

特に台教に親しきは三十四右、五十七右、八十四右、八三十六右、十四三十四右、同三十九左、同五十一左、等であるが就中、疏及義釋に此經、本地身妙法蓮華、最深祕處更に義釋に經の阿、阿引暗隱を法華の開示悟入に配釋してある所なご臺密の鑑賞措し能はざるものである。疏と義釋に就きては智證の義釋目錄を披見せられよ)

されど吾人はかゝる歸結に達する迄にはなほ周到なる準備と嚴正なる考證とを以てする數多の階次を経なくてはならぬが、かゝる系統的考察は他日密教々理史として江湖に咨る心算であり、且つ又今直接所要でないからすべて此れを略し、直ちに前約たる日本天台諸家の密教觀を窺ふこととする。

(A) 局限一致論。

日本天台の始祖傳教大師は唐土に於て兩部大法をば善無畏の法孫で不空系をも兼ね傳ける順曉阿闍梨に傳授し(顯戒論上全集一ノ二五P)其他雜部をば大素比丘江祕靈光、國清寺惟象に承けてをらるゝが(四家血脈譜全集二ノ四十八P)既にその入唐以前に西大寺德清將來の大疏を閱し是れを校訂して延曆寺經藏に納めてゐるを觀るに(義釋目錄緣起 佛全七〇一P)かれが義釋を珍重し隨つて密教を愛翫せしは頗る早きに屬すると謂ふべきであらう。然かもその圓密の關係に就いては後代諸家の如く徹底的に二教一致を主張せず、その態度に於てはたその思想に於て極めて悠々不迫なるを認むる。その請來の上表文(全集四六八三P)に「由斯妙圓極教應聖代而流傳、祕密眞宗、感皇緣而格止」と云ひ

度者を申し下さるゝ中に「一人令讀大毘盧遮那經」とて止觀遮那は全然價值として之れを修するを山上の規矩とはするが尙、法華は嚴然として法華としての本來面目を保持し、又遮那は依然として遮那の尊嚴を繼續して兩々相對峙して、互に兄たり難く弟たり難く而かも兩教を混然たらしむることは無いようである。今私は假りに之れを圓密併行論と名けてをかう。果して然らば、既にかくの如く圓密兩宗は各々特徴あつて全然沒交渉なものであらうか。また、傳教が殊更新珍を喜ぶ浮薄な好奇心から密教を弘めたものであらうか。恐らく山家大師遮那流傳の心裏には法華と何等かの一致點あり、かの三密の妙行はやがて最もよく圓頓一乘の旨趣に共鳴するものであるを看破されてゐるのではなからうか。既に本理大綱集(全集三、二七八頁)に

故眞言教佛、事理俱密之佛也。雖然非密教本佛、法華久成本佛耶。仍一行阿闍梨云、大日如來本地身、妙法蓮華最深祕處、我土不毀常在靈山正是宗瑜伽意耳。謹案此釋曰、祕密教三身是法華本地三身也。雖顯密異、大道無爽耳文、決曰、本佛是觀心教意、尋觀心者與瑜伽觀心一無有二。とあるより見れば、たとひ教相の上では二教各々異つてをるけれども、觀心上に於ては、五相三密觀も三觀十乘の觀法も能入の門に別はあるとも、窮極に於ては共に同一生命内容に結歸するものでなくてはならぬ。かの有名な「眞言止觀其旨一故於一山弘兩宗」てふ言葉は台密諸家珍愛の文であるが、現今學者の間に疑ひを挾むものが多いから暫く擱くも、大師が單に兩教を牛角的同價值だと言

ふに止まらないで、乃ち二者雙行すと雖も極限に於ては一致を暗示するものであらうと考へらるゝ。だから一部天台學者の言ふように、全然大師には圓密調和の思想がないと斷言するのも却つて遮那業の眞理を知らない早計論だと思ふ。やはり後代に至つて徹底的融和思想の起り來るべき源泉は決して日蓮等が酷評的に之れを慈覺に歸してゐる如きものでなく全くこの台祖の暗示的伏線に在ると言ふべきであらう。特にこの事は灌頂七日行事鈔(全、三ノ一P)にも先づ定處として千部法華經殿を八肘の地に内るを説き、兩部祕密許可並大結界式(全四六六セP)には、許可結界をば天台六卽に配し、分眞卽位に法華菩提心灌頂、顯現三摩地、首楞嚴、迹門開三、本門顯一、本迹不二灌頂の六位を述べ、究竟卽位に法華卽身成佛、理智冥合、本有三摩耶、及び三身實修實證ノ灌頂の四位を教へ、就中最後の法華三身實修實證灌頂には

阿(理) 胎藏大日 釋迦(法身)

尾(智) 金界大日 多寶(報身)

吽(冥合) 蘇大日 分身(應身)

とすら言ふてをられる。元來本書は修禪目錄、天台霞標台密目錄等に出てゐないが若しこれをかれの眞撰だとすればその極限一致的思想は餘程の點まで進んでゐたかの如く見受けらるゝ。

然らば、何故大師は顯露堂々と一致の標幟を掲げずにかゝる、融靴搔痒的の説明をされたか。蓋

し是れ大師の圓滿なる人格の致す所、其の「但遮那宗與天台融通疏宗亦同。誠須波此同志但覓彼人豈有愛己憎法哉。法華金光明先帝御願亦一乘旨與眞言無異。伏乞、覓遮那機年々相計令傳通（全集四、七六三P）」と言ふに至つては何ぞそれ寛仁大度なる。故に師自ら進んで諸所に遮那法を修し、終に「眞言祕教未傳此方、最澄阿闍梨幸得此法立爲國師」てふ帝勅を蒙るに至つた。また嘗てかの弘法大師との間に泰範問題の起れる際、獨荷一乘流連俗間……然法華一乘眞言何有優劣（全集四七三五P）と極めて穩健な説諭をしてをられる。然らばその兩者の趣向する極點は何れに在るや。曰く中道實相に契證し卽身成佛するのである。而かも阿字本不生の實相は遮那經の骨目、肉身超證は實にその歸趣であり、正さにこれ現實成道の可能制約である。法華また中道實相を以て體とし、卽身成佛の理趣を説き、かの提婆品所説の龍女成佛の如き全く肉身頓成の具體的例證ではないか。然るに稍もすれば東密弘法大師は法華の宗教を以て經劫作佛とし之れを修行種因海分齊と謂はんとしてゐる。勿論、東密宗家が廣略二論を製せられたのは天長七年であるとするれば（道範問談抄）恰も山家入滅後九年目に當つて之れを知る由もないが、七帖見聞（一ノ本七十六）に山家ノ御釋ニ云新來眞言忘筆授、相承（一行禪師等ノ意志ニ反スルヲ言フ）舊到華嚴失影響規模とあるを大師の眞意であるとするれば、かの「能化龍女無歷劫所化衆生亦無歷劫妙法經力卽身成佛」と言はれたのも勿論玄義三の圖教肉身於一生中有超登十地之義とあるを繼承せられたのであるが、また暗に東密の峻嚴なる態度に對せられ

たものとも察せらるゝ。何れにしてもかく、兩教とも實相の妙理を詮表し即身頓成を理想とする所に相一致すべきものであるてふことが大師の根本思想であり、更に一步を進むれば、全く佛々平等の信念に基いて苟くも速疾頓成の一乘法ならばすべてその間に敢て優劣を決すべきでないのである。特に止觀業と遮那業とは、その究極に至つては一元に歸すべきも、各々その光輝ある歴史を背景とし、その獨自の哲學的色彩と、そして宗教的面目を保持するに於ては兩々誠に棄て難いものがある。今之れを東密宗家の態度と比較したならばその教義的價値の問題は免に角、最もよく兩大師の人格が窺はれて興味津々たるものがあらう。要するに大師の所見をば一言もてこれを盡すならば「極限」一致を目的とする圓密併行論なり」と謂ふべきであらう。

因みに先に引用した本理大綱集は山家祖德撰目集などには偽書の一に數へてゐる程で全く書史學上問題の書であるが今はその吟味をしてる暇がないが、その筆法などより推して予は眞作として差支へないと思ふ。

(B) 理同事別論。

若し台密教相の特徴を以て圓密二教の徹底的調和に在りとするれば嚴密な意味で山家大師の如きはその創成者と言へないであらう。前項に述べたようにかれがその伏線は拵へてをいたにしても台密教相業の實際的功勞者は先づ最初に茲覺大師圓仁を推さなければならぬ。げに師が立てし三顯一密

事理具不具の範疇は永く遮那業家敎判の規模となつてをるのである。更にかれが在唐十數年の蘊蓄を傾注して金疏及蘇疏を製作せる勳積に至つては獨り台門のみに止まらず、密敎々理史上古今獨歩の觀があるではないか。三井の敬光が天台の文句に對して、義釋、及一字經義釋、瑜祇行法記と並べ數へてこれを瑜伽敎の五大疏と稱してゐるものも當然のことである。(覺千、自在金剛集九佛敎全三六〇P參照)又、禪林寺法王の時、了遍(東寺)實寶(三井)隆禪澄尋等(山門)を召して四大師の勝劣を勅問せられた際、慈覺大師が兩經疏を製せられたため最優と決し、之れを藏經に編入するを奏聞するに至つたのも決して大師の功勞に對して過分の報賞でもあるまい(三昧流十八道見聞)今我々はこの兩疏によつてかれが雄渾壯大なる思想の一端を窺ふことゝする。(因みに引文はすべて日本大藏經に依る)先づ大師の判敎はその施設意志よりして之れを推すに絶對利釋と相對利釋とが分け得らるゝ。そ全く義釋の遍一切乘自心成佛と、そして五種三昧道の提説とに基けるもの。既に金剛頂經疏一末の絶對は(二〇〇P)に「是故大興善寺阿闍梨云若就眞言而立敎應云一大圓敎、如來所演無非眞言祕密敎故」と論じてゐる。元來、如來は常恒に眞言道句の法を宣説せらるゝのであるから、一切法門は皆この毘盧性海中からして或は天、明王となり、或は菩薩佛身とそれ〴〵隨流應同して各々に普門三昧中の差別智印を開説したもので、要するに金剛性海の妙波瀾に過ぎないのである。業に大論には祕密敎、顯示敎の名を出し、台祖は顯露定敎、祕密、不定の化儀を説いてゐる。だから釋迦一代

敎とても所詮、大乘に登るものには顯大を説き最上乘の機には密敎を説いたのに外ならない、佛隨自意に就けば、一切の時、はた一切の處にて唯一絶對平等の大圓敎を説くのでなくてはならぬ。而してこの思想はやがて五大院安然の四一判の根源となつてをるものである。然し若し隨他意門の邊から言へば正さに五種三昧耶敎が分るゝ。即ち表示すべき全體は「一」でなければならぬが己れに表現さるべき部分から見ればそれがそのまゝ「多」であるべきである。併し、この「多如」は既に「一」を豫想してをる限りみな大日祕密加持の表現であるから、苟くも如實にこれを體驗する者は、すべて一生に現實そのまゝに理想の常寂光土に契往することが可能であるので、かゝる絶對的見地からすれば全く淺深の別もなく湛然一味な一大圓敎あるのみである。(全疏一ノ末、二〇〇P以下取意)

されど若し相對的な立場からすれば顯密その別が存する。而かもその二敎判は先きに一言觸れてをいたように三乘權敎を以て顯敎とし一乘敎を以て總べて密敎と判する。之れを台祖の化法四敎に配すれば前三は顯の分齊、後の圓敎は密敎であつて假令爾前の昔圓でも亦密敎と稱するに敢て不可はない。既に今昔圓に密敎の稱を許す。此の中に沿く華嚴、法華、涅槃等は悉く攝めて然るべきである。この點に於てかの義釋(餘帙七二十九右)に「如說自心名一切種智則佛性一乘如來祕藏皆入其中」とあるに略々合致するが唯、義釋は華嚴般若等を以て前の極無自性心位に配するのと多少異つてをる。顧ふに、此の祕密てふ詞は嘗て富永伸基氏が出定笑語に「諸家珍愛之言」と評してゐるように廣

く諸大乘教經典に用ひられ、例せば大論には聲聞藏を顯示教、菩薩藏を祕密教とし、涅槃經八には佛祕密法(三德祕藏)華嚴には一切佛界甚深難思議とある如く、東密卽身義等には色々説明してはゐるが、要するに祕藏とは如來自内證に名けたものであるから、其の自證甚深祕密の境界を開顯した佛隨自意教はすべて皆祕密と名けて然るべきであらう。故に今圓融無碍速疾頓成を談する一乘教は之れを呼ぶに祕密祕密教の語を以てするは尤もなことである。(普寂、三大部復眞鈔六佛全一九三下參照)

元來顯教の語は金剛頂五祕密經(閏九二十二左)に若於顯教修行者久經三大無數劫、然後證成無上菩提とあるによつたもので、やはりこれを法相等の大乘權教と見た方が文に親しいようである。また祕密につきては疏十五(餘八三十六右)に「祕密者是如來祕奧之藏久嘿三斯要二如優曇華時乃說之。苟非其人不得授。不同顯露常教」とあるが、之れもやはり台密の見地よりすれば五大院等の言ふように事密の祕奧は一般佛の如く濫りに授くべからざる意味で敢て判教形式ではなからう。以上の事情よりして、——勿論東密の横判は立教開宗上當然の事で寧ろ彼れに於て我々はより多く宗教的價值を認むるものであるが——前唐院が三顯一密を主張せられるのは却つてその素始的意義を詮表したものと云ふべきであらう。また覺苑も義釋演密鈔一ノ三十左に五性各別の三乘教を顯教として總持祕藏を密教とし、「今神變經與此(華嚴等)大同圓教所攝」と言へるも同一轍である。

問題は少々岐路に入つたがさてその祕密に於ても自ら抽象的(理密)なると具象的(事密)なるとの

兩面が存する。随つて但の抽象的理論的密教と、理論と實踐、抽象と具體とを並び備へてをるものがある譯である。而も法華華嚴等の一乘教は色心不二、眞俗不二速疾頓成圓融無碍の理趣即神祕の世界に對して理論的には觸れてはゐるが、まだ瑜伽三密の妙行眞言印契^{インゲイ}等の具體的象徴的表示には及んでゐない。だから之を唯理祕密教と言ふ。之に對して大日金剛頂蘇番地等の經は兩者並び説いてゐるから此れを事理俱密の密教と呼ぶのである。顧ふにかの大日金剛頂等の根本趣旨は斷無明證中道に在る。其中道實相とは畢竟阿字本不生に外ならぬ。げにその本有阿字こそ一部の指歸衆義の都會であるから一切法すべて之を體とせざるはない（日本藏セPノ下）。義釋にも阿字是一切諸法之本、凡最初開口之音皆有阿聲若離阿聲則無一切音説と言ふてゐるが、其阿字こそは全く天台の三諦三觀の妙理に外ならず、義釋にも彼の經の諸法實相は此經の實相であつて別なきを示してゐる（餘七ノ右）。阿字は客觀的大空であるがア・プリオリな根本主觀であるからしてそを契證するは畢竟自心本有の淨菩提心地開顯であり、如實に自心の絶對價値を覺知するとでなくてはならぬ。茲に我々は日夜流れ／＼て止むなき現實の世界の中に、將吾人の靈内そのものゝ上に自ら本有無相の淨菩提心地の具德は存すべく、十界迷悟の當相はその儘己が自覺内容即ち我々の内的生命の象徴的客觀的表示出であり、事理因果各當位の差別智印は宛然として阿字淨菩提心の展開に過ぎぬではないか。だから維摩經に一念不生即是佛と言ひ、法華經に諸法住法位、世間相常住と叫び、乃至天台が天真獨朗

の世界を示し、或は繫緣法界一念法界……一色一香無非中道と唱へてゐるのも廣い意味では這般の消息を物語ると謂ひ得る。かく世俗勝義不二、色心一如を高調する點からして凡て之等を理密と名けて何の支障があらう。けれどこの無相心地の實在を忌憚なく開顯し、意味づけるべき象徴的表現、更にそれを體驗する實踐的行法即ち三密瑜祇行等の事相を説き現してゐるは獨り眞言三部經あるのみである。他の經にも固より眞言印契等を説いてないではないが、實際上具緣等支分を説き事理並に備つて餘蘊なきものは此敎のみである。三密結要諸經所無五智奧源唯在此敎（金疏一、P下）とは蓋し前唐院の中心よりの叫びであらう。之を理同事別と言ひ、理密事密をが生命内容に於て別なのでなく、隨つて法華經と大日經の分岐點は唯此事密を完全に説けるか否かにあつて、勿論、部分的にはこれを漏らしてをらぬではないから其經の組織大系の上に多少の差は免れぬにしても決して優劣を判すべきではなからう。（金疏 五下ノ部）併し、斯る分け方は唯、量のカテゴリーを適用してのみ、それを可能ならしめんとするのであるが、質そのものゝ問題をも顧みない時には、その規準は極めて曖昧たるを免れぬであらう。事實金光明經等の如きはこれをかの蘇悉地經等に對照するに遜色なき迄に多く事密的要素を含んでゐるが、而も是をしも猶、唯理敎と名け得らるゝであらうか。一度公正な立場から觀ればその兩者の分水界は充分に確められなくなり、隨つて師の提説は一往の概念に過ぎないとなつてしまふ。だからこの事別てふ考へを一層徹底さす爲には是非共質そのもの

の、上からも吟味しなくてはならぬ。これによつて蘇疏（一ノ十二ノ下）には自ら質疑應答して

問華嚴維摩般若法華等諸大乘教於此顯密何等攝耶。答如華嚴維摩等諸大乘教皆密教也。問若如云皆密教者與今所立眞言祕教有何等異。答彼華嚴等經雖俱爲密而未盡如來祕密之旨故與今所立眞言教別。假令雖少說密言等未爲究盡如來祕密之意。今所立毘盧遮那金剛頂等經咸皆究盡如來事理俱密之意。是故爲別也。（金疏一五P下參照）

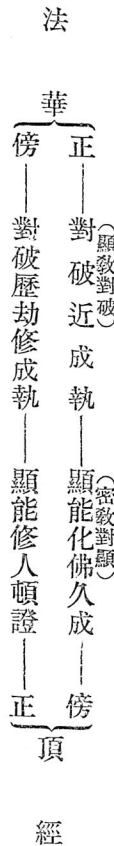
と論及するに至つては、明かに、法華等を以て如來祕密の境界を完全に表出してゐない者として暗に理同事勝的口吻を洩してゐる。然らば何故佛意の表示が全現されぬであらうか。彼の意向を推すに之は恐らく實在と價值との問題に於て決定さるべきであらう。げに實體化された理念の詮表若くは之を経験事象に表現するてふ點は、凡ての一乗教の許す所であるが、そが完全に究竟的に表出されなくては、唯論理上の理想に過ぎぬであらう。且一般大乘は餘り實在其者の詮顯に勉めて價値的世界には觸るゝことが少ない。併し、金剛瑜伽の三部經のみ最もよく、又最も圓滿に存在と意味の一如的融合、實在そのものをして絶對的な價値體系たらしめた者であらう。だから若し如來大悲が單なる實在論的表現を要求するのではなく、其本意が寧ろ眞摯な宗教的體驗にある限り、後者の方が其本質に於ても、また如來事理俱密の意を究め盡してゐると云ふべきである。だがかゝる考へ方は五大院に至つて徹底したのであるが、今之を慈覺大師に覚めるのは或は一步出過ぎてゐるかも知れぬ。併

し此法華等に少説密言を許す思想はやがて東密密嚴院に影響し、遂に顯密不同頌（全集四〇〇p）に兩教の差別點を列擧する中「顯說分理祕」密事理俱密」と數へしむるに至つたのも聊か注意に値する。

遮莫、前唐院が眞言經を以て已究盡としたは良いが法華を以て未究竟とせるに於ては、身自ら藉を台門に置くものとしては寧ろ自殺的解釋とも言ふべく、此意味に於てかの日蓮が酷評當らずと雖も多少理がないではない。然らばその三顯一密てふ二教分判の根據は果して奈邊に存するか。之につき前唐院の考へは金蘇の疏の中所々に散存してゐるが今それを概括的に言へば次のようである。

(a) 能説佛意の立場から。凡そ顯教とは顯示顯略教で佛隨意の方便教である。密教は誠に佛の自覺内容を如實に、ありのまゝに開顯した隨自意教である。自内證の自由表現の教へで他の意志に轉縛されない所から、之を自受法樂教と名くに於てまた一段の深旨を發揮するものであらう。法華に長者大宅の譬喩に於て三權一實の旨を詮し、義釋に經の如實知自心を釋するに法華の窮兒喩を以て佛知見に開示悟入すべきを教へたのも全くこの理趣の體驗を意味するものである。頂疏一本（十五p下）參照かくて大日如來とは後節に述ぶる如く東密古師のように釋迦三身の外に大日三身を立てるのである。大釋は根本的一致と習ふ所である。悉多太子一切義成就菩薩が金剛座に坐して即身成佛されたのが大日如來である（守護經、金剛頂經）。だから全く法華本門開顯の釋迦久成の相こそ大日如來でなければならぬ。之は台祖が文句や玄義などに毘廬遮那、盧遮那、釋迦文の三佛を或は法報應の三身に

或は境妙、智妙、行妙の究竟に配して不一不異不縱不橫と言ふてゐるのを一層徹底せしめた觀がある。然らば何故法華に久成とし、頂經に頓成と説いてゐるかといふとに各々その目的に於て傍正があるからである。と云ふのは法華は只管近成の執を對破して能化の佛の久遠成道を明すを主眼とするから、佛內證を永恒の相に於て見たものであり、頂經は専ら歷劫修成てふ時間の形式に拘はるゝ執を對治して能修の行者の頓證を顯すを本趣とするから、すべてを一念の相に歸したまでゝある。



故に壽量品の佛と頂經の如來とは本質の上では異なるものではない。疏三(餘七三十右)義釋三十四右に「衆生一念中、有如來壽量長遠之身寂光海會、」とあるもこの意味である。要するに顯教は單應化佛としての釋尊の方便施設の教、密教は三身融即の自受用內證自覺聖智法と言ふべきである。(頂疏一十六^P上蘇一疏二十九^P下取意)。この思想を憶念しつゝ唐決集を披くに會々德圓は宗頤に質疑する中第六條に(日本大藏經四一四^P)今天台門人等云毗盧遮那與本地釋迦同體之佛、俱體俱用。但是名之差別、無有異解……………今有眞言宗云說法華經佛爲下劣佛、若說毗盧遮那經佛爲高勝佛。と並べ擧げてゐるが後者の今有眞言宗とは東密が天台の本門佛を以て具惑の分齊として自家の所謂普門大日と勝劣を判じてゐるを指したものだ、前者の天台門人等云云とは主としてこの慈覺寺の考へ方

を言ふたものであらう。

(b) 形而上論の立場から。絶對者はたすべての創造者である阿字は自ら本不生の太虚として永遠の沈黙を守ると同時に、盡きせぬ韻律は、この絶對者の活動發展の形式として、また一切法の純粹創造の形式として持續されゆくのである。かくて、すべて顯教は阿字不變を知つて隨縁を知らず隨つて諸法圓融無碍を言はない。假令一步を譲つて諸法の融通を述べてゐるとしても、それは畢竟止觀業に所謂攝相歸性門の分齊に過ぎず、空假二諦を破して但中の理に還元してのみ可能である。相卽を談すれども背面相反か二物和合の意味に止まり勝義諦と世俗諦と隔歴し、唯識を説いて唯色を識らないから心境亦融することなく、或は五姓各別を執じて塵々法々皆無盡莊嚴の曼荼羅てふ理趣を悟らない。隨つて事々無碍法界だとか、龜卽妙だとか、卽事而真だとか言ふ高妙の世界は彼等の夢想だにし得ない所であらう。これを顯教權門の分齊とする。さて密教とは相法全如、如體全相、色體全心、心體全色、不二無碍、性相融卽、物心一如、周遍法界の教義を説く宗教であるから、差別の當相卽平等、事造の諸法をのまゝ三千三諦の妙理を圓具して十界依正悉く曼荼羅莊嚴てふ體驗がその中心生命である。(金疏一本十五P 同十Pノ下參照)

(c) 聲字を基調として。ロゴスてふ觀念その價值その内容に就いては希臘哲學上重要な一問題であるが今密教の聲字のそれに就いてもこれと同一一般である。顯教は世間の何等内容なき聲字を以て經

體としてゐるから皆妄語である。顛倒語である。實在と一致しないものである。然るに眞言教は先驗法爾のそれを以て經の綱格としてゐるから如義語である。そして眞實語である。物そのものゝ象徴である。随つてそれ等によつて詮はさるゝ教へも不徹底と徹底と別るゝ譯である。この意味に於いて密教を最勝了義教と言ふ。然らばかの事理俱密の經は固より法然道の如義語を以て説くは明かであるが、猶法華々嚴に眞如言説てふことを認むることは如何にして可能であらうか。一体、理密教は先に言つたように世俗勝義圓融無碍なる阿字本不生の理趣を詮表するもの、随つて苟くもかゝる神祕の世界は存在と意味とが一如に結合した如義言説を須ひなくては完全に表出し得られないから、法華等も當然眞如語であるべきである。何となれば頂疏一（十八Pノ上）に「又如來内證但寂靜无言等者即是顯教所說也、彼教未知如來内證甚深義故、今此祕密教其義不然、寂照俱時寂故、法界但寂照故……如來内證義如是」と言つてゐるように既に顯教が言亡慮絶廢詮談旨など論じてゐる内證の境地をば遺憾なく開顯するに如義語でないとするれば名體相違てふ論理的矛盾に陥るであらう。だから、法華に寂照俱時、華嚴に文義一致更に密教に聲字即實相と言ふてゐるのも永く三乘顯教と別なるを意味するものである。因みに法相の徳一は眞言宗未決文（日本藏六二九P）に自家の立場から眞言聲字説を難じてゐる。披見せられよ。

(d) 修證の見地から。かくて顯教は圓融無碍の理を識らないから全く漸々に修學して、久しうして

證果を得る歷劫修成の漸教である。而かもその體驗の歷程は程めて難險、證果の得不に就いては最も必然性に乏しい。同時に密教は一如の理を徹見して因果の範疇を超越し、時空の形式に拘はれず頓極頓速に得證する。だから頓教と言ふ。玄義に「圓教肉身於一生中有超登十地」、五祕密經に「現生起十地」そして義釋に「若三密解起此凡夫之身轉爲如來此身之外無別佛身」とあるものこの意である。故に密教での成道は最も速疾に、現實に即して而かも絶對的必至である。よし、不幸にして現身に契證出來ずして異生にてその理想を實現し得るとしても、三大劫なんぞを要する筈はない。(蘇疏一三二Pノ下、金疏二「現證」題號釋下參照)

然らば如何にして密教の肉身成佛は可能なるかと言ふに他なし。「行」が最も勝れてゐるからである。げに五相三密等の妙觀妙行によつてのみ如實に生佛一如、三法無差の理を體驗し得られ、隨つてこれが最もよく佛意に應ふものであらう。而かもこの實踐法を遺憾なく説破せるが眞言經であるから先述の如き未究盡、已究盡の分點は「理念」の上でなく寧ろ「行」の問題に於てのみ認めらるべきである。だから頂疏一ノ本(十一Pノ上)に頂經の宗を明して「正以佛因佛果爲今經宗……言佛因者所謂明了五部修行三密加持勝妙等也。言佛果者所謂顯現毘盧那五智遍法界體也」と述べてゐる。則ちこれは、同じく阿字實相を體とする邊、また經宗たる佛果に於ても法華と頂經と變りはないが、同じく宗たる佛因にその差別を認むる意向であらうか。特に顯教の佛因果とは明に區別して「彼は歷

劫修證因果、此卽不歷修證因果是故異也」と論定してゐる。更にこれを極論すれば彼れは斷妄開眞として全く現實界を虛妄顛倒の迷界として、極力之れを斷破しやがて獨空無相の消極的眞理を見出さんとする修德教たるに反し、これは既に因心の本具を高潮し、畢竟自己先驗本有の淨善提心の功德を如實に開顯せんとする非迷非悟の性德教であると言ふべきである。之れは東密で言ふ過患斷、功德斷と同一説明である。

如上の外、師は頂經を名體宗用教でふ天台の五重玄義の範疇をもて釋するに、第五判教の下に於て諸藏の中、密教をば三藏では修多羅、二藏では菩薩、八藏では佛藏、五藏では陀羅尼藏に、又諸乗中には一佛乘に、諸教中には滿、祕密、頓教に攝むべく亦顯の十二分教に對して此の十二分教あるを示してゐる。

要するに、前唐院が三顯一密と判するは良し。されど法華を以て未究盡とせるはやがてかの超八醍醐純圓獨妙の宗風と抵觸するを免れぬ。特にその後輩に至つては餘りに事密を偏愛するの極、大日經法華經を理同と言ふは實は鹿論門一往の説で、再往尅實すれば三密事相を説かない所から稍もすれば法華を爾前教を貶する傾向を生ずるに至つた。かくて、後に述べる如く、證眞の二宗同異章等の辨證は確かにこの反動として産み出されたものであらう。されば宗大寺口決十七丁左に等海が「尋云慈覺唯理祕密事理俱密釋、傳教眞言止觀其旨全同御釋也。何可レ用耶。」とて心賀の説を擧げ

て「何傳教御義爲[△]正可建立天台宗也。兩宗俱明果地果海[△]上本覺修行故無[△]不同[△]也。無[△]五相三密[△]名目[△]事[△]兩宗各別也。依[△]名目[△]不可論[△]宗淺深[△]。天台三業相應一心三觀一念三千眞言[△]五相三密[△]修行[△]云計[△]不同也。全[△]本覺重[△]不可有[△]不同[△]也」と評是してゐる。その慈覺をすて、尙根本大師に依らんする所、誠に台門の縉徒としては穩當な態度である。且又、密教とそして日本天台惠心流の中心生命たる本覺の法門との本質的一致を試みてゐるのは最も嘉みすべきである。兎に角慈覺大師は固より山家大師の衣鉢を傳へたものであらうが、その圓密一致の思想は法全^{ハツセン}より影響せらるゝ所少くないと思ふ。法全につきては今日幸にも曼荼羅問答一卷(慈覺問、法全答)が残つてゐるからその思想の一端を窺ひ得らるゝ。就中阿字觀を説明して

若觀阿字餘字皆攝阿字。只觀一字若具觀者其門別異、然則具觀之時不必想阿字義、凡阿字只是惣體、從阿字而發菩提心、此旨尤同止觀之旨。唯在不思議境、從此境而眞正發心、上根於不思議得悟。

中下更至於眞正發等耳、(上根者不思議、中根者從初至第七對治助開、下根者始終具觀之云々)亦此如是、上根者唯於阿字悟諸法不可得、不用餘字(日本藏一六九P)

とて、これを止觀の十乘觀法に同せしめてゐる、この考へは更に次の智證に於て最も具體的に表現さるゝに至つた。安然亦菩提心義抄六及四、會異融通集に、別な論證法を以てこれを承け説明してゐる。また同書に天台に性惡不斷普現色身と言ふてゐるのが甚だ眞言の旨と合致するを問答してゐる。

るなどは亦注意に値すると思ふ。

(C) 徹底的一致論。

前項に述べたように慈覺はよく圓密二教を調和させてはゐるが、猶すべてを概念で取り扱つてゐるてふ觀がある。更に一步を進めてより具體的に、より實際的にそして徹底的に法華眞言二教の融和一致を辨證したものは先づ我が智證大師圓珍であらう。勿論、師につきてはその所論が急激であつた爲めか、それとも弘法大師との姻戚關係等よりしてか宛も台門に於ける圓劣密勝説の巨魁である如く往々誤解してゐるものが少くない。今予は一般と多少異つた意見を述べ肉袒して江湖の叱責を待ちつゝ、師が冤罪に對する辯護を試みんとするものである。

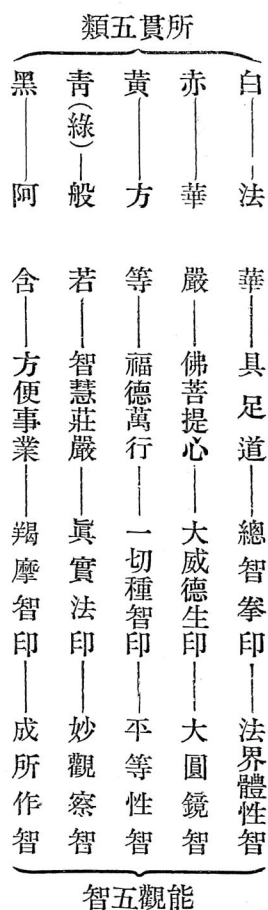
(a) 五時五智の配屬。凡そ密教の特徴は横統一切佛教に在るべく、諸河の衆流さながらに海に入つて同一鹹味となるように、すべての一切佛教は皆毘盧性海に潮宗するものである。大日胎藏宗には因、根、究竟の三句を明し、大小半滿權實顯密等の不同はあるがすべてこの中に攝することが出来る。又金剛頂宗に就かば因、行、證、入、方便の五轉と法界體性智乃至成所作智の五智を出でず、この中に一切を引接し統攝するものである。而して特に五智五時の配屬は入眞言門住如實見講演法華略儀上(日本藏三四五P)に出で、全く大師の創見である。蓋し經とは素恒覽即ち綬線の意味だから一代教は能貫五智の綬線によつて織り成されたものに外ならぬ。先づ五時教の中最初の華嚴は大圓鏡

智を根本とする。何となれば華嚴は海印定の盧舍那圓滿報身が圓滿修多羅を説いたもの(教)、その理は絶対唯心論の立場から普賢大菩提心の内容を展開せるもので、その圓滿身こそ大圓鏡智そのまゝの相であり、大菩提心こそまた其素質である。随つてその行、果も畢竟大圓鏡智なるを類推し得る。方等部教は平等性智を根本とする。これは既に金光明經に是金光明は一切種智を根本とする旨を説いてゐるが正さにこの一切種智の體こそ眞言門平等大慧大悲萬行即ち南方寶生如來の三摩地である。般若經は妙觀察智を根本とする。彼の部中、よく其不共の種々の機縁を鑒察して、衆生の執を淘汰するからこの通別圖を帶説する般若をば聲聞獨覺諸佛眞實法印と名ける。更に成所作佛智を根本とするは阿含經である。常に此教の人は法華信解品に所謂客作賤人と云ふのであるが一度根本大日より流現せる成所作智に體達する時は生佛一如の理に醒めて再び客作賤人の隔見を起すことはない。最後に法華一部は純圓獨妙超八醒醐の法であるから法界體性智を根本とする。十方佛土中唯一乘法とは正さにこの絶対の見地を指したものでなければならぬ。かくて師は「然今此法華二五成就爲一切經爲根本、故名具足也」と結論してゐる。これは法華が台祖より六祖荆溪に至つていよいよ峻嚴獨勝視せられ(普寂、三大部復眞鈔佛全二五P參照)今、後唐院に至つてこの考へが一層徹底せしめられた譯である。故にこれ亦天台判教史上から見ても、最も注意すべき點であらう。今これを圖示せば、

(五色)

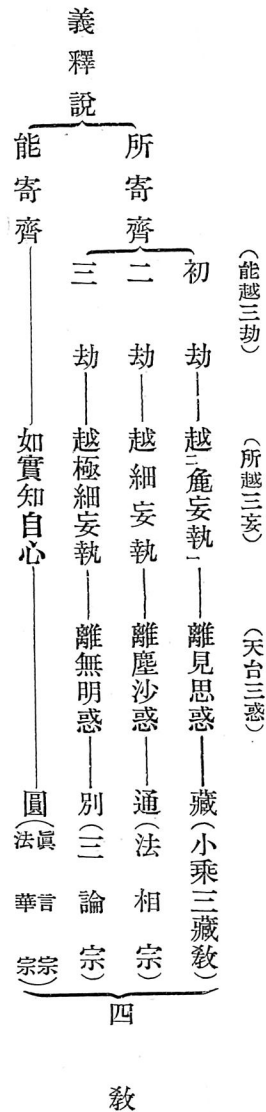
(五時)

(能點ノ五類)



となる。これは多少附會的の觀がないでもないが要するに法華は一切教能生の根本、能現の源であつて、自ら稱性の本教を以て任ずるかの華嚴の如きも、亦法華法界性智、即ち大日の大威德より生じた圓滿報身の説法に過ぎなくなる。(e)欸と對照せよ。故に差別智印たる四智に貫通さるゝ爾前の四教はすべて法華經王に統攝さるべく、眞言經と全然等同一味で別に法華の外大日經等を見ないのである。これ師が常に金剛乘を愛翫せられ乍らも、尙、自己が使命を忘れなかつた所以であらう。乃ち師が後代敬光のように北嶺の五教(藏通・別・圓・密)を立てゝ遂に天台四教の範疇を破壊し、事實上東密の十住心と質に於て變りはなくするような舉に出でなかつたのは敬服に値する。特に上表文(年譜貞觀十三年條)(又、天台霞標、三代實錄仁和三年條下略同様)に「討天台眞言傳之旨眼心相通、水乳和合、故南岳天台三觀一心之宗原起阿字本不生之理。無畏不空三密同體之教冥扶圓頓一實之趣」と。以てその意向を察すべきである。

(b)四教三劫の配屬。如上の見解は更にかれが天台化法四教判を以て大日經住心品所說三劫に配釋してをるによつて一層明瞭にさるゝ。



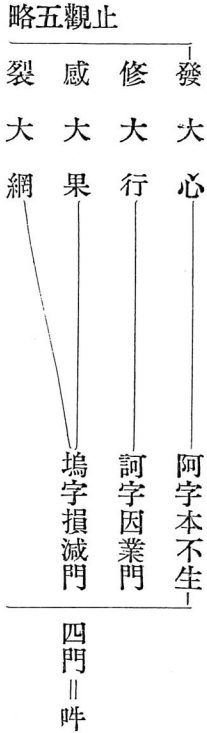
ど。これは智證の新案ではなくかの義釋の説明ど、台祖の提説とを配合せしめた迄である。かく圓教(今圓昔圓々體無殊)に兩教を攝した所に、全く圓密調和を徹底さすべく勉めた彼の心裏が窺はる。然るに、弘法大師がかの堅判教に於て、如實知自心をば第八住心位とし、法華を以て之に充て「天台國清寺智者禪師依此門修止觀得法華三昧……構一家義」とて、其思想を概説し、「於諸顯教是究竟理法身望眞言門是則入道初門(初法明道)……如是一心無明邊域非明分位」と貶蔑し、剩へこれを極無自性心てふ華嚴の下に置たのは、台家としては恕すべからざることである。之に對して智證は安然の如く手強くは反駁はせないが大日經旨揮(全集六五六P)には暗々裏に之を非難してゐる。其序に言ふ。

於是唐朝老宿貶醍醐於生蘇(これは唐決下ノ二左に廣脩が寂光に、また同書下ノ三十八左に維獨が

修禪に應答して折角醍醐の妙法たる大日經を方等部の生蘇に貶し攝めたこと）本國幼童^{△△△}濫甘露干毒乳（日本にて法華一乘を無明の分域としたのは恐らく弘法大師位のものであらう。）遂使平等凉味混差別之雜血、久成師子同未化羝羊（弘法大師が久遠實成の佛を具惑の佛として凡夫と同列とした。）私悲其如此……冀俾兩方之學輩（止觀遮那）知一道指揮云爾也。

かくて瑜伽教は全く法華の純理を経験上に體現せしむるものであるから、抽象的概念的である天台の五時八教判も猶三劫五轉等と融和する所に具體的實際的意味は現はれてくるのである。而かも一代教各々にその個別的價值を認めつゝ法華、隨つて眞言を以て統攝せんとしたのは、恰も弘法大師が廣論に於て普門大日教を以て一切宗教を統一せんとした企圖と兩々相對映するものである。

(c) 吽^{ウン}字と五略の配屬。講演法華儀の説である。元來吽字は東密の吽字義にも言ふてあるように開けば訶・阿・塢・摩（*Hūm = ha + a + ū + m*）であるから序での如く因業（*hetu*）本不生（*adyanūtpada*）損減（*ūna*）及び大空（悉曇では *Anusvāra* を大空點とす）の意味であるから次の如くなる。



「歸 大 處」——摩字大空門——

この思想は恐らく師法全に萌芽し、更に安然の會異融通集に至つて五轉五略に配する素地をなしたものである。

(d)法華不及の文に就いて。然るに智證は世人より圓劣密勝の主唱者となしてをる。特に眞宗の石泉僧叡など四教儀講錄に乃是情論我不取也と言つてゐる。石泉が取らないのは勝手だが、かく智證が槍玉に揚げらるゝは旨揮(全集六七P)の法華尙不及の語と「故法華涅槃爲爾前教、攝八教之判甚爲不可耳」の辨明によるのである。これによれば智證が密勝論者であると言はれてもまた止むを得ないであらう。併しこれは唯、三密妙行を説けるは到底法華も及ばないし、その説時も法華涅槃の後にあるが今圓昔圓體無殊だから敢て教理の淺深を意味するものでないと辯護し得ぬでもない。随つて本書の終りの「智者大師所說四教還攝總持門……若言非者深違師宗內證祕密教、外說顯示教故一切果門依此證」の言葉も又大日經抄の大日經を一切諸經の根本祕藏とせるも(東密杲實抄一本三初引用之)超八醍醐の法華には關せぬと見ねばならぬ。さなくては先の本國幼童云云の批評と抵觸して明かに大師をして自家撞着に陥らしむるものである。(因みに胎金瑜伽記(佛敎全三二章)には、心月輪の解釋に就き東密家をば破してゐる)

(e)眞言過程説。然るに授決集下卷(全集五六P)に「大品經觀普賢經」等を引いて「須恨自暗唯見大日法

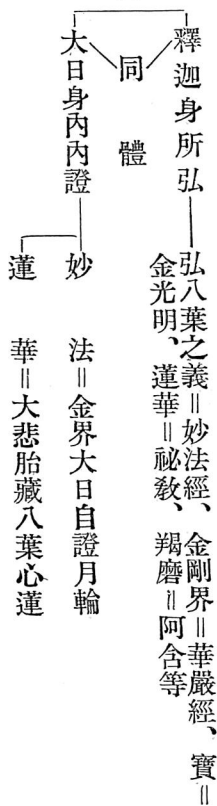
身卽釋迦牟尼、釋迦牟尼大日法身徧一切處本來常住無始無終、若不然者皆小乘之義也。絶ルカニ非法華實相妙極之旨、と云ひ、同下卷(全集五九P)に「凡八萬法藏統其行相、不出四教……眞言禪門等能所教理爭過此四……謬誦眞言、不會三觀一心妙趣、恐同別人、不證妙理……若望法華華嚴涅槃等經是接引門」とて却つて眞言禪門も亦法華一乘に歸入すべき過程であつて、天台一心三觀に契應せざる眞言は皆謬りであるとすら斷言してゐる。願つて再び上卷(全集六P)を見るに、「法華不攝八教中圓教決と標擧して、かの唐土の天台座主(廣脩?)が法華を以て非頓而頓、非漸而漸てふ曖昧な説明を施したのに對して不徹底であるとして「彼八中圓是所生圓、能歸圓……故依絶對奪義爲正……既融四味成醍醐、更無他味、再三說言唯有一乘、教部俱圓更覓何文、猶若不會據經覓經何異旨疊」と痛評してゐる。この意氣揚々たる法華獨勝説はやがて前款の思想と齟齬するものでなからうか。この點に着眼したのは日蓮である。師が眞言見聞(録内聖敎三十七)にこの矛盾を指摘し、之れを考證して授決集が自筆であるは疑ひないが旨歸は多く知られてないし、公家の日記にも出てゐないから恐らく後人の僞作ではあるまいかと疑つてゐる。これは誠に卓見だと思ふ。日蓮の言はれたように、前者はその序から見ても確かであるが旨歸は先きに言ふ如く、自ら前後矛盾の思想を含んでゐる程であるからたとひかの理同事勝を鼓吹してゐる理智一門集、顯密一如本佛のやうに僞作とせずとも、恐らく大師の大日經の講説を遮那業徒が纏めたものであらう。特に些々疑問に菩提心論をば疑ひて

不空集とせるに旨歸に明に「龍猛菩提心論云々」とあるなどはいよく師が自著としての確實性を薄くするものであらう。また法華論記に菩提心論の文を會通して唯眞言法中者即是法華本覺門是也。

於諸教中者是三論法相也と言ふのと旨揮の自餘諸數中云々とは亦相容れぬものである。

(f) 一代教の兩部配屬。貞觀十三年の上表文に依れば全く大師の意趣は眞言を以て圓頓一實を冥扶せんため、たとひその業は異つても二教は共に醍醐であり同じく深祕である。特にその佛究竟實教を説くに至つては其の致は一揆でなければならぬ。(天安二年奏請文)これ師が、かの法華を未究竟と云へる慈覺と轍を異にするものである。然らば何故法華の外に眞言を説くかと言ふに彼は有相爲本、此は無相爲本の宗教だから、所謂氷乳和合の理趣を徹底せしめんため且つ圓頓一實の旨を徹底さすてふ目的である。講演法華儀、法華諸品配釋及兩界和合義の解釋は畢竟それに外ならぬ。

△眞言門



(g) 法華と兩界配屬、これは後節に譲る。

(h) 諸師の評。諸師と言ふても廣く台藉を涉臘した譯ではないが、その二三を紹介してをく。先づ

七帖見聞一本四十九左に貞舜は天台眞言同異事と標して、弘法は眞言勝、傳教は顯密同、慈覺は理同事別、智證は天台勝とて師の法華超勝説を出してゐる。かと思ふと等海は口傳抄十七ノ五右に「眞言事理俱一向天台——弘法智證御義也」と見てゐる。證眞の二宗同異章四丁には「所引講演法華義眞言門法華云爲救世人迷教諍言法華所詮永異祕宗破法趣向三惡道」とあるは蓋し智證の意を得たものであらう。更に敬光が「吾六祖智證大師、獨住如實知見而窮甚深之底。開難入之門、教一乘學生得能入……世人得至最深祕之處。以故若詳今釋則非特蓮經文顯深旨。一代五時之設皆爲瑜伽祕宗也。眞實開顯妙旨此之謂歟。志台密者棄之他求則甚深之底安得而探之哉」とこれ亦遮那業徒よりしては當然の評である。

之れを要するに智證は徹底的顯密一致を高調しこれを具體的に立證したものであるが、始終法華圓頓一實の立場を動せず、毫も台宗の面目を損滅することはなかつた。特に圓頓一乘の旨を冥扶せんとふ意向を漏せる所はた恒に法華の説永く祕宗に異なるを云々するは趣向三惡道と誠める當りは全く傳教大師の併行論を一層徹底せしめた觀がある。請ふ、師が遺誠の一節を見よ

我沒後莫修佛事。唯講一乘妙典讚嘆天台法門。令行布薩矣。(未完)